

---

**準備中**

バンダナ・ピカチュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

準備中

### 【Nコード】

N2212V

### 【作者名】

バンダナ・ピカチュン

### 【あらすじ】

この世界の恋愛は少し特殊です。神が用意した1日恋人と言う物でいろんな人と出会い、気に入った人が居れば積極的に1日恋人に誘い、互いに惹かれ合えば結婚する。そんな世界です。ちなみに結婚した後に浮気すると死刑なので、結婚しない人がとても多いです。結婚可能年齢は15から。

## プロローグ

死にたい……

私はそれだけしか  
思っ  
て  
な  
か  
っ  
た  
……

小学校ではいじめられ  
中学校では無視されてる

本当に嫌だった。

この世界が……

私の家族を奪い、

私を省かれ者にした  
この世界が……

気づけば私は  
学校の屋上に居た……

もう、死にたい……

いや、生きたくない……

作者

「やあ。」

私

「こ、来ないで！  
来たら飛び降りるよ！」

私は端の方まで  
走って行った。

作者

「まあ、そう言わないで  
僕の話も聞いてよ。  
実は僕も死にに  
来たんだ。」

私

「え……………」

作者

「まあ、とりあえず  
お互い死ぬ前に

この世界の不満を  
ぶち撒けようか。」

私

「う、うん……」

私はこの人と話をした。

私とは異なった

馬鹿馬鹿しい理由だけど

死にたいと思う事は

同じだった……

作者

「……………」

私

「……………」

作者

「そっか。

僕が死ぬのは

おかしいか……」

私

「うん、あなたは

まだ絶望するには

早いと思う。」

作者

「そっか

ならさ、死ぬ前に僕に

協力してくれない？」

私

「協力？」

作者

「僕とデートして

欲しいんだ。」

私

「どうして？」

作者

「僕はまだ女子が  
怖い……」

小学校の時みたいに  
また僕の事を  
いじめてくるかも  
しれないって  
どうしても  
考えちゃうんだ（実話）

私はこれを了承した。

それで救われるのなら  
私は嬉しい。

死ぬのは私だけで  
充分だから…… ● 1年後

私は彼としばらく  
恋人同士みたいに  
過ごしていた。

そして私は彼の事が  
好きになった。

ちよつと優しくされた  
だけで私にとつては  
大きな愛だった。

そして私はいつの間にか  
彼の家に住む事にな  
っていた。

彼の親は私に  
家族がいない事を知ると  
大胆にも私を  
養子にした。

そう、私は彼の妹に

なつたのだ。

しかも、ただの  
妹ではない……

作者母

「いい、理沙ちゃん。  
我慢できなくなったら  
いつでも子供作って  
いいからね！  
責任はちゃんと  
とるから！」

作者父

「おいおい、母さん。  
俺がAV買う金と  
風俗行く金  
節約させるつもりか？」

作者

「問題は

そこじゃないよ！  
つて、クソババア  
妹に向かって  
なんつて事を……  
あと、お父さんは  
何子供の前で  
AVとかキャバクラとか  
言ってるの！？  
少しは自重してよ！」

作者父

「理沙、悪いが  
こいつが働くまでは  
子供は2人ぐらいで  
我慢してくれないか？」

作者

「まだ来たばかりの  
女の子を呼び捨てに  
するなんて  
どういう神経してるの？  
あと、子供作るのは  
前提にするのは  
やめてもらえませんか？」

理沙

(くすっ……)

この家族と一緒に居ると  
暖かい気持ちになる……

作者

「よし、分かった！  
そこまで言うなら  
子供作ってやる！  
理沙ちゃん。  
やるよ！」

理沙

「う、うん／＼」

彼は性欲が強い人だから  
相手をするのが  
大変です。

まあ、そんな彼と  
一緒に部屋で寝たいって  
お願いした私も  
私だけ……

今日も熱い夜が来ます。

彼と体を重ねる夜が……  
● 高校1年生のある日

私はお兄ちゃんと  
同じクラスです。

私とお兄ちゃんは  
もちろん噂に  
なっているけど  
私は気にしません。

だってお兄ちゃんは  
私の最愛の人だから……

私だけと仲良くしないと  
駄目なんだから……

作者

「ん……なんだ、  
ラブレターか……」

理沙

「誰から？」

作者

「名前はなし。  
放課後校舎裏に  
来て欲しいんだって。」

理沙

「……………行くの？」

作者

「いや、帰りは理沙と  
ゲーセンに行くよ。」

理沙

「やった！」

作者

「ところで理沙、  
さっき怖い顔してたけど  
理沙ってヤンデレ？」

理沙

「え、そんな事はないと  
思うけど……」

作者

「じゃあ僕の質問に  
正直に答えて。」

理沙

「う、うん……」

作者

「もし僕が他の女の子と  
ラブラブになったら  
どうする？」

理沙

「とりあえず殺す。」

作者

「って、その時点で  
ヤンデレだよ！」

理沙

「もしかしたら  
お兄ちゃんも  
殺しちゃうかもよ？」

作者

「理沙に殺されるのなら  
僕は本望さ」

理沙

「……………バカ」

作者

「作者に5000の  
萌えダメージが……………」

私がヤンデレ？

まさかね……………

でも、もし  
お兄ちゃんが  
他の女の子と  
仲良くなったら……………

今度からスタンガンを  
持ち歩こうかな……

**第1話：デスノートを拾ってきた&黒銀龍大はレイズノートで人を生き返らせ**

●作者の部屋

理沙

「ねえ、お兄ちゃん。」

作者

「やるのか？」

理沙

「ち、違うよ／＼  
そうじゃなくて

理沙さ、デスノート  
拾ってきたんだけど……

作者

「あー、そう……え？  
デスノート……って、  
なんだってええええ！」

理沙

「捨てた方が  
いいのかな？」

作者

「そ、そんな事  
しちゃ駄目だよ！  
もったいない！  
せつかくだから  
僕達で理想の世界を  
作り上げようよ。」

理沙

「うん。」

作者

「あ、まさか、理沙に  
エッチな事ばかりしてる  
お兄ちゃんを  
殺すなんて事は  
しないよね？」

理沙

「え、えつちな事は  
理沙も好きなの！／／」

作者

「全く、理沙は  
やらしいなあ（笑）」

理沙

「……………バカ」

作者

「ご褒美きたああああ！

理沙

「そ、そんな事よりも  
理想の世界って  
どんな世界なの？」

作者

「まあ、とりあえず  
可愛い女の子が  
たくさん……」

理沙

「お兄ちゃん？」

作者

「おねげしますだ！  
命だけは……ん……」

私はお兄ちゃんに  
軽くキスをした。

理沙

「お兄ちゃんは  
私だけを見ないと  
駄目なんだよ？」

作者

「デレありがとう  
ございます。」

もうお腹いっぱいです。  
あ、いや、まだ理沙を  
食べないと……」

理沙

「も、もう／＼」

お兄ちゃんのせいで  
私は変態キャラです……

まあ、同じクラスの  
橘君よりはマシだと思  
うけど……

私もお兄ちゃんのお  
宝本、後で見て

みようかな…… ●黒銀龍大の部屋

黒銀龍大

「なんか最近死者が多いよな……」

伊藤誠

「だったらお前がレイズノートで生き返らせればいいんじゃないのか？」

黒銀龍大

「俺は自分の好きな奴らしか生き返らせない。美人かお前みたいな面白い奴とかキャラの濃い奴とか読者の要望で生き返らせたいときた奴とか……」

伊藤誠

「へー」

黒銀龍大

「お前と西園寺と桂の  
やりとりは聞いてて  
面白いからな。」

伊藤誠

「こっちは真剣なんだぞ  
相手するのが楽な世界か  
胸が大きい言葉に  
するか……」

俺は犯罪者

ハンマー

硝酸男

斧男

を生き返らせた後  
誠にこう言った。

黒銀龍大

「やっぱお前、  
好きだぜ。」 ● 1ヶ月後

L

「渡、ここが  
○○理沙の居る  
学校なんですネ……」

渡

「はい、間違い  
ありません。」

L

「では、夜神総一郎さん  
達と連絡が  
取り合えるように  
しておいて下さい。  
何が起きるか  
分かりませんから……」

渡

「分かりました。」

さて、○○理沙。

お前がどうやって  
人を殺してるのかを  
調べさせてもらうぞ……

ピカチュン

（もうしは主人公の事を  
キラだと推測しています  
人を殺せる主人公に  
人を生き返らせられる  
黒銀龍大。

そして悪を裁くし。  
なんかデスノート  
小説になりそうな  
雰囲気ですが、  
気のせいです。  
気にしないで  
下さい（、、）

## 第2話：日常（前書き）

ポツチャマ（黒銀龍大）

「ヤンデレな作者の書く  
ヤンデレ小説か……」

ピカチュン（作者）

「はい、自分で言うのも  
どうかと思いますが  
僕もヤンデレ  
ですからね（「」）」

ポツチャマ

「ところで

こんな小説を書いてたら  
F - 105の更新が  
遅くならないのか？」

ピカチュン

「大丈夫です。  
この小説は作者が  
スランプ状態で

面白い話が  
書けない時だけ  
更新しますから。」

ポツチャマ

「つて、事は  
今スランプ状態  
なんだな……」

ピカチュン

「(。。(。そ、そんな事  
ないですよ(。(。□。(。;)」

ポツチャマ

「……………」

## 第2話：日常

●校門

伊吹風子

「良かったら  
これどうぞ！」

作者

「ん……恐竜の足跡？」

理沙

「星じゃないかな？」

橘純一

「いや、ヒトデじゃ  
ないかな？」

伊吹風子

「橘さんの言う通りです  
これがヒトデだと  
分からないなんて  
作者さん  
おかしいです。」

作者

「ぐはっ、辛口だな……  
でも、ロリ属性だから  
許す！」

理沙

「こいつは絶対に  
デスノートで  
始末してやる……」

伊吹風子

「あ、良かったら  
これ……」

黒銀龍大

「作者、理沙、橘。よう  
3人で何やってるんだ？」

作者

「3人つて……」

橘純一

「伊吹さんも居るよ。」

黒銀龍大

「伊吹………伊吹………」

伊吹………伊………あ、

風子、居たのか。

チビだから

分からなかったぜ。」

伊吹風子

「黒銀さん最低です。」

理沙

「……………」

黒銀君、もしかしたら  
風子ちゃんの事  
本当は見え……

リュウザキ（Ｌ）

「おはようございます」

作者

「あ、天才学生の  
リュウザキじゃないか。  
僕達に何か用？」

リュウザキ（Ｌ）

「いえ、ただ伊吹さんが  
ヒトデを配っていたので  
それを受け取ろうと……」

黒銀龍大

「伊吹風子？ヒトデ？  
いったい何の事だ？」

伊吹風子

「やっぱり黒銀さん  
最低です」

作者

「そして僕は  
最高ののさ！」

伊吹風子

「作者さんは  
変な人です。」

作者

「ズッカーーン！」

橘純一

「ズッカーン！  
ですか……」

理沙

「……………」

ロリ属性の子は  
私の敵……

お兄ちゃんを  
取られないように早く  
始末しないとね……

黒銀龍大

へどうして俺の手に  
星の彫刻が……」

伊吹風子

「……………」  
●教室

このページだけは  
作者視点です。

阿部高和

「今日は○○先生が  
病気で休みなので  
俺が変わりにきた。  
とりあえず女子は自習だ  
男子は今からテストを  
受けてもらう。」

男子達

「え……………」

阿部高和

「安心しろ。  
簡単な質問に  
答えるだけさ。」

なんだか面倒な事になっ  
たな……

とりあえずテストやってみるか……

第1問

$1 + 1 = 2$ である。

第2問

危ない仲間を見たら  
すぐに助けに行く。

第3問

男より女が好き。

第4問

掘るという言葉を知っている。

第5問

やらないか

まず1は○だな。2以外に何があるって  
言うんだよ。

そして2は×。

恋人なら助けるけど  
友達は嫌だな。  
危ないから……

3は……リアルの女は  
怖いから男の方が  
好きかな？

4もちろん知っています  
クソミソワイです。

5は適当に

『やりましょうwww  
と、でも  
書いておくか……』

そして30分後……

阿部高和

「ほう……」

面白い奴が居るな……

作者、授業が終わったら  
男子トイレまでこい。」

作者

「ウホッ！」

実は男に興味が  
あります（嘘）

理沙

「私だけのお兄ちゃんの  
あきらメロンが  
危ない……  
削除してやる……  
削除削除削除削除削除削  
除削除削除削除削除……

Q・な、なんか  
理沙の顔が怖いのは  
気のせいですか？

A・いいえ、彼女は  
ヤンデレです（「、」  
）

阿部さん、ごめんなさい  
彼女は男にも  
嫉妬するんです……  
●40秒後

理沙

「間に合った……」

お兄ちゃんに  
手を出す奴は  
たとえ男でも  
許さない……

そしてお昼休み。

オトコノ・タマタマ

「おい、作者、理沙。  
一緒に昼飯食わないか？

理沙

「他の女は  
誘ってない？」

オトコノ・タマタマ

「ああ。」

理沙

「ならよし。」

作者

「相変わらず理沙は嫉妬妬きだなあ……」

オトコノ・タマタマ

「お前も大変だな。」

作者

「甘いタマタマ。

独占欲が強い

女の子は萌えるんだよ。

ちよつとエッチなところ

も僕は好きだ！」

理沙

「バ、バカノ」

と、言いつつも  
好きと言われて  
嬉しい……

作者

「はは、ごめんごめん」

オトコノ・タマタマ

「よし、黒銀と  
橘とリュウザキでも  
誘って昼飯を  
食べるか。」

女が居ないのなら  
ギリギリOK。

でも、お兄ちゃんと  
男の人が仲良く  
していても  
嫉妬する私……

お兄ちゃんと

仲良くしていいのは  
私だけなのに……

お兄ちゃんの好きな  
ポニーテールで貧乳で  
口リ顔なのは  
私だけなのに……

お兄ちゃんと  
えっちな事を  
毎日しているのは  
私だけなのに……

作者

「理沙はやっぱり  
ヤンデレだなあ。」

理沙

「違うよ!」

相変わらずお兄ちゃんは  
私の事をヤンデレって  
言う……

私はただ

この世界の中で

お兄ちゃんだけを

見ているだけなのに……  
●屋上

橘純一

「でさ、森島先輩が

僕のラーメンに

からあげを入れて

くれたんだ！」

黒銀龍大

「くそお！

お前なんか先を

超させるとは……」

作者

「ふん、年上キャラは  
僕の眼中にないな。」

理沙

「さすがお兄ちゃん！  
愛してるよ！」

リュウザキ（Ｌ）

「異常な兄妹愛  
ですね……」

黒銀龍大

「ああ、お前は  
転校してきた  
ばかりだから  
知らないだろうけど  
作者と理沙ちゃんは  
血のつながってない  
兄妹なんだ。」

リュウザキ（Ｌ）

「なるほど……」

作者

「血が繋がってない妹であつても

『お兄ちゃん』と

呼んでくれると

かなり萌えるぞ！」

理沙

「お兄ちゃん♪」

作者

「ウハッ！

作者に50000の

萌えダメージ（ ）  
「

オトコノ・タマタマ

「なあ、理沙。

俺の名前を

フルネームで

答えてくれないか？」

理沙

「男の玉た……」

黒銀龍大

「言わせねえよ！」

理沙

「あ、でも理沙が一番  
お兄ちゃんのタマ〇〇が  
好き。」

作者

「嬉しいこと

言ってくれるじゃないの  
それじゃあ、とことん  
喜ばせてやらないとな」

理沙

「お、お願い／＼」

黒銀龍大

「お前ら、少しは  
自重しろよ……」

作者

「だが断る（「」）」

理沙

「お兄ちゃん  
大好き……」

リュウザキ（「」）

「あの、1つ質問して  
いいですか？」

理沙

「うん、何？」リュウザキ（「」）

「もし作者君に

近づく女性が居たら  
どうしますか？」

理沙

「殺すけど。」

もう5人殺したしね……

リュウザキ（L）

「どうやって？」

理沙

「そうだなあ……」

ロケランぶち込んだり  
エア―アサシン  
したり……」

リュウザキ（L）

「真面目に答えて下さい

理沙

「じゃあ逆に聞くけど  
バレないで簡単に  
殺す方法ってあるの？」

リュウザキ（Ｌ）

「ありませんね。  
キラみたいな  
力がないと。」

作者

「ああ、あの  
正義の裁きとか  
ほざいてる  
奴の事か……」

リュウザキ（Ｌ）

「作者君は  
キラが嫌いですか？」

作者

「犯罪者よりも  
ブスを殺した方が絶対に  
いいって（本音）」

オトコノ・タマタマ

「俺もそう思うぜ！」

黒銀龍大

「いや、ここは  
やっぱり貧乳勢を  
殺した方が……」

作者

「そんなおかしい！  
貧乳はステータス  
なんだぞ！  
僕の萌え属性を  
消さないでくれ！」

黒銀龍大

「しかし、胸が  
大きくないと  
揉みごたえがないだろ」

作者

「そんなの詭弁だ！」

オトコノ・タマタマ

「甘いな作者。

最近は胸の大きい奴の  
需要が高いんだ。」

作者

「それはエゴだよ。」

橘純一

「ガンダムネタ……」

理沙

「貧乳を熱く語る

お兄ちゃん格好いい……

リュウザキ（し）

「……………」オトコノ・タマタマ

「そういえば

理沙は料理できるのか？

理沙

「できないよ。」

作者

「はは、理沙が

料理を作ろうとすると

ダークマターとか

ベトベターとか

できるからね。」

理沙

「お兄ちゃんは

料理のできない

女の子は嫌い？」

作者

「エロければ  
問題ない（「」）」

理沙

「……………バカ」

作者

「ありがとう  
ございます（「」）」

黒銀龍大

「男の俺が料理  
作れるのに（実話）」  
理沙ちゃんは  
料理作れないのか……………」

理沙

「そこはえっちで

頑張るよ！」

作者

「ははは！」

橘純一

「僕もいつか森島先輩と  
こんな会話を  
するように……」

リュウザキ（L）

「……………」

とりあえずこの人達は  
お兄ちゃんと  
えっちな事できないから  
お兄ちゃんを取られる  
心配はないよね……

でも、やっぱり  
お兄ちゃんと

仲良くしている  
奴らを見ると  
腹が立つてくる……

これが女だったら  
間違えなく……

こうして、嫉妬する事が  
私の日常です。

大人になって  
働くようになったら  
ニートになってる  
お兄ちゃんを  
監禁しちゃおうかな……

## 第2話：日常（後書き）

ピカチュン（作者）

「理沙ちゃんの

『……………バカ』

と言うセリフの案は

ポツチャマから

提案された物です。

僕はあんまり言われて

嬉しくないですけど

ツンデレ大好きな

ポツチャマにとつては

萌える言葉みたいです」

ポツチャマ（黒銀龍大）

「本当は

ツンデレキャラに使って

欲しかったんだけどな」

ピカチュン

「まあ、F-105が

1周目に突入した時に

ツンデレキャラ用の

セリフとして

使わせてもらいますよ」

ポツチャマ

「そんなネタバレ言っ  
て大丈夫か？」

ピカチュン

「大丈夫じゃない。  
問題ある（「」）」

ポツチャマ

「では、また次回に  
お会いしましょう。」

ピカチュン

「スルーだ！？  
ええい！（「。□」）  
腕を上げたな、  
ポツチャマ……」

### 第3話：家での日常

#### ● 作者の部屋

私はお兄ちゃんの

部屋に入ると

ブラとパンツと

20cmスカートしか  
身につけない。

それぞれ30色以上の  
バリエーションがある。

本当は裸でも

いいんだけど

お兄ちゃんが言うには

『裸より薄着が

興奮するのだ（ ）  
らしい。』

私はお兄ちゃんの  
薄着より裸の方が  
好きなんだけど……

作者

「はあ……」

理沙

「……………」

とりあえず着替えたら  
お兄ちゃんが  
学生で我慢してた分を  
私とのえつちで  
満足して貰う。

はずだったんだけど……

作者

「ねえ、理沙。

今日は僕疲れてるから

ゲームで勘弁……」

理沙

「駄目。

えっちしたい。」

作者

「どうしても？」

理沙

「どうしても。」

昔はお兄ちゃんの方が  
性欲が強かったんだけど  
今は私の方が強い。

いくら大好きな  
お兄ちゃんでも  
1日1回のえっちは  
どんなに疲れていても  
してもらう。

だって、そうしないと

生きてるって  
実感できないから……

作者

「よし、それじゃあ  
ちよつと照れた感じで  
お願いしてよ。」

理沙

「あのね、理沙  
お兄ちゃんと  
えっち……  
えっちしたいの／＼」

作者

「グッジョブ！」

ああ、気持ちいい……

私、今日も生きてる……

この興奮する感じ  
かなりいい……

ドキドキして  
発情して……

やっぱり、私は  
変態なのかなあ……作者

「理沙、お兄ちゃん  
エッチな事して  
疲れてちゃったから  
ちよつと昼寝するよ。」

理沙

「うん、分かった。」

さて、お兄ちゃんが  
寝てる間は  
アーマード・コアでも

やってようかな……

（星を廻らせ  
世界の真ん中で  
くしゃ……）

私はお兄ちゃんの  
携帯電話を開いた。

黒銀君からの  
メールだ……

なあ、今からゲーセンに  
行かないか？  
理沙ちゃんに  
怒られそうだったら  
理沙ちゃんも一緒に  
連れきていいぞ。

理沙

「お兄ちゃんは  
寝てますと……送信」

黒銀君となら  
メールしてても  
ギリギリOK。

最近はお兄を狙う男も  
居るから  
お兄ちゃんをなるべく  
私の知らない男から  
引き離さないと……

（生き残りたい  
生き残りたい  
また……）

なら、仕方ないな。  
奴には午後7時から  
ナイフ模擬だつて  
伝えてくれ。

あと、理沙ちゃん。  
ちよつとは

料理できるようになつて  
相棒に美味いメシを  
作つて欲しい。

女の子の料理が  
食べられなくて

発狂してたからな（笑）

理沙

「料理……か……」

うん、そうだよね……

料理ぐらいできないと

お兄ちゃんのお嫁さんになれないよね……

じゃないと、  
他の女がお兄ちゃんにお弁当を作ってきた時  
私は何も  
できないよね……

私は決心した。

お兄ちゃんのために……  
●夜

このページだけ  
作者視点

もう夜か……

理沙

「お、お兄ちゃん……」

作者

「どうしたの？」

理沙

「お兄ちゃんのために  
夕ご飯作ったの……」

作者

「ま、まさか  
ダークマ……」

理沙

「ううん、ゆで卵だよ。  
他のおかずは  
お母さんの作った物。」

作者

「ゆで卵か……  
ダークマターには  
ならなかったの？」

理沙

「……………バカ」

作者

「やつほおおおい！」

理沙

「生だとお腹壊しちゃう  
かもしれないって思って  
じつくり  
茹でたんだけど……………」

作者

「どのくらい茹でたの？」

理沙

「1時間くらい。」

作者

「／（＾Ｏ＾）＼」

クソババア、  
茹でる時間ぐらい  
教えてやれよ……

でも、難しい料理に  
挑戦されるよりは  
マシだったかな？理沙

「……………」

作者

「そんなに  
落ち込まなくて  
大丈夫だよ。」

理沙

「でも……」

お兄ちゃんは半熟が  
好きだった事を  
知らなかったなんて  
彼女失格かも……

作者

「苦手な事の1つや2つ  
あっても僕は  
気にしないよ。」

理沙

「本当？」

作者

「もちろんだよ。」

理沙

「嘘だったら  
一緒に死んでね。」

作者

「萌えキタコレ（  
）」

理沙

「……………バカ」

はぁ……………

私何回お兄ちゃんに  
「……………バカ」って  
言ってるんだろ……………

でも、いいよね。

お兄ちゃんも  
嫌がってないし。

私も口癖になってるし。

お兄ちゃんが  
私をからかう。

←  
私が照れて

「……………バカ」  
と言う。

←  
お兄ちゃんが萌えて

（……………）  
こんな顔をする。

これが私達の日常です。

#### 第4話：告白、そして失った大切な物。

○月○日

私は今日も大切な人を  
遠くから見ていた。

私を救ってくれた王子様

彼は今日も友達と妹と  
一緒に登校している。

あの妹は彼にベタベタと  
くっついていて。

目障りだ。

彼は顔を赤らめているが  
まんざらでも  
ないみたいだ。

彼はただ、妹の  
成長した体に男として  
触りたいだけなのに  
妹はそれを愛だと  
勘違いしている……

早く彼を妹を  
引き離さないと  
お互いのためにも  
よくない。

私はあの女と違って  
料理や洗濯……  
家事全般できるし  
経済面も安定している。

彼は  
「僕はニートになる！」  
って、言ってるけど  
私なら彼のその願いを  
叶えてあげる事ができる  
私は彼の求める物を全て  
手に入れる事ができる。

それなのに、  
彼は家事も  
ろくにできない  
あの女の近くに居る。

きつと可哀想だから  
仕方なくて  
付き合ってるんだよね。

家族が借金取りのせいで  
自殺しちゃったから

優しい彼は  
家族も居ない  
勉強もできない  
友達もできない  
いじめられっ子な  
人間として  
クズ以下のあの女に  
情けをかけている  
ただだよな？

でも、それは  
駄目なんだよ。

クズはこの世界に  
居ない方がいい。

だって、この世界に  
クズが居たら、  
彼がまた優しくして  
彼に恋する女が  
増えるから……

彼にふさわしいのは  
この世界で私だけ。

幼い頃から勉強・運動  
家事・武術を習っていた  
私だけがふさわしい……

人生を1秒でも無駄に

過ぎた事のある

クズ女には

彼に恋する

資格なんてない。

彼の視界に入る

資格もない。

彼と同じ空気を吸う

資格すらない。

彼があんな女と

結ばれる前に

なんとかしないと……○月・日

彼はあの星の彫刻を

配っている女にも

色目を使っている……

いい加減にして欲しい。

彼と会話する資格も

ないのに……

少しは立場を

わきまえて欲しい。

彼はそんな気安く

話しかけていい  
相手じゃない。

そんな事も  
分からないなんて……

仕方ない。

こうなったら  
告白するしかない。

この私が告白すれば  
さすがの彼も冷静では  
いられないはず。

だって、私は……○月…日

私は彼に告白した。

しかし彼……いや、  
その男は下品な笑いを、  
そして私のことを  
罵倒すると  
立ち去った……

もう、私の知っている  
彼は居ない……

この世界は終わった……

私はこの世界から  
早く解き放たれて  
私の知っている彼に  
会いたかった。

ただ、私の知っている  
彼に会うためには  
彼の顔をした  
あの下品な男を  
消さないと……

待っててね作者君。

あなたの顔をした  
あの男を消して  
本当のあなたに  
会いに行くから……

## 第5話：失った物

### ● 作者視点

作者

「……………また  
ラブレターだ……………」

理沙

「お兄ちゃんは  
もちろん断るよね？」

作者

「もちろんさ！  
僕は理沙萌え  
なんだ（　　）」

理沙

「お兄ちゃん、大好き！

作者

「グヘヘヘ……」

あ、時間は今日の

HR前……

つて、今！？

悪い理沙、

先に教室に行つてて！」

理沙

「うん、絶対に

断つてきてね！」

作者

「了解（、、ズ」

差出人不明か……

面倒だけに行くか。

これが二見さんからの

ラブレターだったら  
紳士として理沙を捨てて  
二見さんを選ぶ（　　）  
●屋上

屋上には水亀先生しか  
居なかった。

あれ？ロリコンな僕は  
何か危機を感じるよ？

まさかね……

水亀先生

「作者君、  
ちよつといいかな？」

作者

「あ、すみません。  
ちよつと待ち合わせが  
あるので……」

水亀先生

「呼び出したのは  
私です。」

ですよねー w w w w

作者

「……………」

水亀先生

「私は作者君の事が  
好きです。」

私と付き合って下さい」

作者

「だが断る」

反撃速度0・3秒！

水亀先生

「……………やっぱり  
私より妹さんの方が  
いいのね？」

作者

「いえ、ただ僕は  
教師と生徒が  
そういう関係になるのは  
よくないかなと思った  
だけです。」

僕はThe正論で  
切り返した。

水亀先生

「でも作者君、  
昔私に会った時に……」

作者

「恨みっこ無しですよ。  
惚れた君が  
悪いのさ（「」）」

水亀先生

「……………」

まあ、水亀先生とは  
昔いろいろ  
あつたんですよ。

とりあえずあの時は  
女の子とやりたくて  
モテる（二次元限定）  
この容姿を利用して  
下は小学生から  
上は教師までフラグを  
立てまくったんですよ。

まあ、今となつては  
理沙が居るから  
他の女の子なんて

どうしても……

いや、年上の女なんて  
どうでもいい。

作者

「悪いですけど  
二度と僕に  
近寄らないで下さい。  
年上は嫌いだし  
生徒に手を出す  
教師なんて  
気持ち悪いし、  
賞味期間切れの女性は  
相手にしない  
主義なので。  
それでは。」

こうして水亀先生の話は  
完結………しませんでした。

そして次の日の放課後。

僕は先生に呼ばれた。

水亀先生

「私の作者君を  
返さない……」

作者

「はい、病みましたね」

水亀先生

「あなたを消して  
私は作者君に  
会いに行くの！」

そして僕は拘束された。

だけど大丈夫。



うるさい！！！！」

こうして、理沙と先生は  
戦う……前に

理沙は拘束された。

この人には並大抵の  
力なんかじゃ  
勝てないだろう。

水亀先生

「まずはお前から  
消してやる……」

そして水亀先生は  
理沙を屋上から  
突き落とそうと  
していた……

理沙が危ない！

● 選択肢

・ 逃げる

・ 助ける

・ 突き落とす

水亀先生

「私の作者君を  
返せ……」

理沙

「やめて！」

作者君

「はあああああ！」

ドガッ！

水亀先生

「きゃ！」

理沙

「え……………」

●選択肢

・逃げる

・助ける

○突き落とす

2人とも落ちてしまった間違った／（＾Ｏ＾）＼

作者

「……………」

見なかった事に  
しておくか……

その判断が最悪の事態を  
引き起こす事を

僕はまだ知らなかった。  
●病院

次の日、僕は病院で  
理沙に会いに行った。

作者

「理沙、お待たせ。」

理沙

「？」

どうしたのか  
理沙の反応が  
いまいちだ……

理沙の大好きな

お兄ちゃんが  
わざわざ来たのに……

理沙

「あなたは誰？」

え………

B  
A  
D  
  
E  
N  
D

## 第6話：メガネっ子

● 佐藤真中視点

黒銀龍大

「おい作者。

そんなに

落ち込むなよ……」

作者

「そんな事言ったって

理沙が僕の事を

覚えてないなんて……」

作者君、すごく

落ち込んでる……

仲良しだった妹さんが

自分の事を

覚えてないなんて

ショックだよね……

私は昔作者君に  
励まされた事がある。

今、その恩返しを  
しないと……

私は作者君の席まで  
行こうとした……

（バタッ！）

作者

「佐藤さん、大丈夫！？

黒銀龍大

「また転んだか……」

佐藤真中

「あうう……」

私は何もない所で  
よく転んでしまいます。

作者

「はは、相変わらず  
佐藤さんは  
ドジっ子だね。  
まあ、可愛いから  
いいけどね。」

佐藤真中

「か、可愛い……」

作者

「で、僕に  
何か用事かな？」

佐藤真中

「あ、いえ……」

結局作者君を励ます事は  
できなかった。

私って、いざとなると  
何もできない  
人間だなあ……

## 第7話：あやめちゃん

● 屋上

坂上あやめ

「センパイ、  
何悩んでるんっすか？」

作者

「ああ、あやめちゃん」

この子は坂上あやめ。

暴走する事が多いけど  
いざという時は  
とても頼りになる  
可愛い後輩だ。

作者

「いや、理沙が  
僕の事を覚えて  
居ないらしくて……  
それで少し  
落ち込んでたんだ。」

坂上あやめ

「元氣出して下さい。  
センパイには  
あやめが居るっスよ。」

作者

「うん、そうだね。」

坂上あやめ

「センパイ、  
今日は一緒にゲーセン  
行かないっスか？」

作者

「ああ、いいね。  
それじゃあ

行こうかな。」

例えあやめちゃんが  
どんなに頑張っても  
理沙の代わりには  
ならないだろう。

だって僕は……

貧乳好きだから（「」）

## 第8話：無口少女

### ●図書室

僕は宿題を

終わらせるために  
図書室に来ていた。

こういう調べる宿題って  
苦手なんだよな……

結崎恵

「……………」

髪の長い無口な少女が  
僕の横に座る。

僕はその子にキスをして  
肩を寄せる。

彼女は真っ赤な  
顔をしながらも  
安心した様子で  
目を閉じる。

この後輩は浮気相手だ。

理沙と付き合い始めて  
1年後にいろいろあつて  
付き合う事になった。

しゃべった事は  
1度もないけど  
僕と彼女は互いに  
求め合ったのだ。

僕は彼女の口リ顔を。

彼女は僕の愛を……

作者

「あのさ、結崎さん。  
この場所  
分からないんだけど  
教えてくれない？」

結崎恵

「……………」

作者

「その目は  
『自分でやらないと  
勉強にならないでしょ  
って、言ってるね。』」

結崎恵

「……………」

作者

「分かったよ。  
自分でやるよ。」

結崎恵

(ににっ)

結崎さんは相変わらず  
美しいし可愛い……

理沙とどっちか

選べって言われたら

結崎さんかな……

## 第9話：セニョール！

### ●作者の家

今日は親の帰りが  
遅いから  
夕飯はコンビニで  
買ってこようかな？

（ピンポン）

作者

「はい。」

僕はお客さんを  
向かい入れた。

大倉都子

「作者、はいこれ。」

作者

「あ、夕飯か。  
ありがとう。」

大倉都子

「別にいいわよ。  
いつもの事だし。  
ねえ、今日は  
一緒に食べない？」

作者

「ああ、うん。いいよ」

僕は知っている。

都子は僕に気がある  
という事を。

作者

「ねえ、都子。  
デート行かない？」

大倉都子

「もー、しつこいな……  
わかったわよ。  
デートすれば  
いいんですよ。  
デートすれば。」

作者

「よっしやあああああ！  
大佐、僕やりました！」

大倉都子

「ちょ、ちよつと、  
そんなに大きな声  
出さないの。  
ご近所迷惑でしょ。」

……それで  
どこに行きたいの？」

作者

「そうだな……  
今月の１１日に  
遊園地に行かない？」

大倉都子

「さては暇なんですよ？  
……まあ、  
その日は用事もないし  
付き合ってあげる。」

作者

「それじゃあ、  
待ち合わせは……。」

大倉都子

「あなたの家に  
迎えに行くから。  
ちゃんと、起きててね」

作者

「了解（、、ゞ」

こうして僕は

ロビー君フラグを立てた

早くロビー君に

会いたいな……

第10話：作者の仕事（バイト）時給10万円

しばらく経って

理沙は退院した。

日常生活を送れるぐらい

回復したらしいが

それでも記憶は

戻らなかった。

理沙

「お兄ちゃん、

あれ欲しいよー。」

作者

「あれ……」

1000万円の

バッグか……」

理沙

「いい？」

作者

「そうだな……」

記憶を失う前の理沙は  
家族を失ったり  
学校の奴らから酷い目に  
遭わされてたんだ。

記憶を失った今は  
理沙に少しでも辛い想い  
はさせたくない。

理沙の求める物を全て  
理沙にあげよう。

1000万円なら  
親の保険金で……

作者

（アギト、出番だよ。）

死神アギト

（ハハハハハハ！）

やってやる。

このデスノートで  
理沙の求める世界を  
作ってやる！親、ゲーム、  
僕の物全てを  
金に変えたけど  
理沙が満足できるほど  
金はない……

黒銀龍大

「金に困ってるのか？」

作者

「はは、まあね。  
家の姫君は高い物が  
好きだからね……」

黒銀龍大

「なら、バイトしないと  
キツイだろ？」  
（デスノートを  
使いすぎると  
しとかいう奴に  
見つかると思うぞ。）

作者

「だね。  
でも、時給10万の  
仕事なんてないよね？」

黒銀龍大

「いや、あるぞ。」

作者

「マジで!？」

黒銀龍大

「ホモタウンの  
ボスが求人している。  
ちよつと裸になるだけで  
時給10万だ。  
悪くないだろ？」

作者

「いいね！  
その仕事紹介してよ！」

黒銀龍大

「ただ、な……  
その仕事をするのには  
覚悟が必要なんだ。  
なんせ相手は  
ホモタウンの……」

作者

「そんな事は  
どうだっていいよ！  
早く紹介して！」

黒銀龍大

「……………どうなっても  
知らないぞ。」

ボツチャマ  
黒銀龍大

「あいつは話を  
聞かない奴だよ。  
彼はホモと言う言葉を  
聞き取らなかった  
みたいけど  
大丈夫か？」

ピカチュン

「僕は言っている。  
愛があれば  
どんな困難にも  
立ち向かえるのが  
人間だと……………」  
●ホモタウン

さて、理沙が  
新しいゲームに  
はまっているうちに  
僕は金を稼がないとな。

僕はクロックタワーの  
城に似ている場所に来た

シザーマンとか  
居そうだな……

順子

「あら、あなたが  
バイトの子？」

気持ち悪いおっさんが  
話しかけてきた。

作者

「はい、伊藤作者です」

順子

「親は？」

作者

「伊藤誠に伊藤言葉です  
どちらも先月殺……  
無理心中しました。」

順子

「あら、そうなの？  
気の毒ね。  
そんな事より  
あなたの目は  
ママにそっくりよ。」

作者

「そうなんですか？」

順子

「ええ、暗くて  
深い闇の目。

現実を見てない虚ろな目  
現実を超越した何かを  
見ている目。

あなたはママと同じで  
現実に生きるには  
もったいない人よ。  
きっとママとは  
気が合うと思うわ。」

作者

「……………そんな事より  
ホモエモンさんは  
どこに居ますか？」

順子

「私のママね。  
せつかくだから  
一緒に行きましょう。」

作者

「そうですね。」

なんだか分からないけど  
この人は少し変わってる  
みたいだな…… ● S M ルーム

順子

「ママー、作者さんが  
来たわよ。」

ホモエモン

「ウホッ、いい男……」

作者

「はじめまして。  
伊藤作者です。  
よろしく願います」

順子

「あの有名な伊藤誠の  
息子ですって。」

ホモエモン

「誠様！……ハアハア！

作者

「あ、あの……」

ホモエモン

「ハアハア……

早く……彼と……

1つに……順ちゃん。

彼をあそこに

縛りなさい！」

作者

「え……」

僕は無理やり  
天井に吊された。

ホモエモン

「ムチ……ムチは……  
あつた！」

ホモエモンさんは  
鞭を取り出して  
僕に迫ってきた。

作者

へお、落ち着くんた……  
時給10万だぞ！  
毎日1時間働けば1週間  
70万……土日に  
3時間働けば  
110万……  
鞭で打たれるぐらい……

(。 。 )

(パシンッ！)

「。 。 」

(パシンッ！)

(。 □。 ！)

(パシンッ！)

／ ( ^ ^ ) ！

(パシンッ！)

こうして、  
いい仕事(?)を  
見つけました。

理沙のためだ。

背中肉が  
剥がれようと  
頑張らないと……

## 第10話：新理沙

●休日

理沙

「ねえ、お兄ちゃん。  
デート行こう。」

作者

「OK！（  
早速行こうか！」

理沙

「それでさ、  
どっちのセットの方が  
いいと思う？  
回答次第では  
デート無しね。」

作者

「わ、分かったよ……」

こ、これは人生最大の  
危機だ……

適当に答えたら  
デートできない  
|| 理沙に嫌われる  
|| 僕に生きる価値は  
なくなる……

こ、これは人生最大の  
ピンチだ……

とりあえず僕は  
フリルが嫌いだから……

結局僕は同級生の

見ていた雑誌のページを  
思い出しながら決めた。

理沙

「無難過ぎるね……」

作者

☆(。□。;)☆

まだだ……

まだ終わってない！

作者

「他の女が

この服を着たら

普通だろうけど

理沙が着ると

他の女どもにはない

魅力が強調されて

逆にいいんだよ！

無難な服装が他の人とは  
違う魅力を持  
っている事を  
強調できる  
一番の服装なんだよ！」

理沙

「じゃあさ、  
着替えるから  
外で待ってて。」

作者

「嫌だ！  
僕は理沙の着替えを  
見たいんだ！」

理沙

「あ、嫌なら  
もうお兄ちゃんって  
呼ばないよ。」

作者

「今すぐ出て行きます」

はあ……最近の理沙は  
恥じらいという物を  
覚えてしまったから  
部屋も別だし  
ベッドの上の運動も  
恋人同士で  
するような事も  
しなくなったからな……

でも、そんな理沙も  
大好きだ！●商店街

理沙

「お兄ちゃん  
どこか行きたい  
場所ある？」

作者

「ラブホかな。」

理沙

「私は服が欲しいかも」

作者

「ラブホか。  
いいね、行こう！」

理沙

「お兄ちゃん、  
私帰るよ？」

作者

「よし、服屋に行くか」

結局服屋に行って  
15万円も使った。

理沙

「お兄ちゃん。  
お昼。 Pasta 食べたい。」

作者

「うん、いいね。」

理沙

「ただし、  
専門店限定ね。」

作者

「了解（ ）、  
」

そしてレストランで……

店員

「ご注文は？」

理沙

「カルボナーラに  
プディング  
赤ワインを1つ。」

店員

「お客様、未成年の方に  
アルコールは……」

作者

「そんな事言つて  
大丈夫かい？  
この店の裏情報を  
探偵雇つて調べたんだ。  
ここの店長が  
風俗に行つてゐる写真が  
公になったら  
女性客の多い  
この店は……」

店員

「失礼いたしました！  
お客様のご注文は？」

作者

---

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

お冷下さい」

店員

↙

.....  
L

そして会計は

23万……いや、

見なかった事に  
しておこう……  
●家

理沙

「えへへへ……  
お兄ちゃんお兄ちゃん」

お酒を弱い理沙は  
1口でデロデロに  
なってしまったので  
おんぶして帰ってきた。

理沙

「お兄ちゃん、  
えへへへ……  
一緒に寝よう」

作者

「OK!」  
「」

なんで理沙が  
酒を飲む事を黙って  
見過ごしているかと  
いうと、  
酔った理沙は  
急に色っぽくなって  
僕を誘惑してくるのだ。

理沙

「お兄ちゃん、  
体が熱いよ……」

作者

「なら脱いだら？」

理沙

「あ、そうだね……  
うー……上手に  
脱げないよお……  
お兄ちゃん  
手伝ってえ……」

作者

「（　　）」

やっぱり僕は  
理沙が好きだ。

結崎さんと理沙の  
2人がメインだな。

二股最高！（　　）」

## 次回から本編開始

ポツチャマ

「こんな小説で  
大丈夫か？」

ピカチュン

「大丈夫だ、問題ない」

ポツチャマ

「この小説は何を目的に  
しているんだ？」

ピカチュン

「ネタ（「」）」

ポツチャマ

「……………」

ピカチュン

「とりあえず

思いつくままに書いて

自分で面白いと

思った話は改良して

他の小説で

使おうと……」

ポツチャマ

「つまりメモか？」

ピカチュン

「まあね（「」）

とりあえず『ネタ回』と

『恋愛回』に分けます。

ネタ回の際は本当に

カオスな小説になると

思いますが、

よろしくお願いします。

F - 105と

ネタ被りする

所もあるので

ご了承下さい。」

ポツチャマ

「ネタの使い回し……」

ピカチュン

「リサイクルと言って  
欲しいな（「」）」

ポツチャマ

「……………」

## 第12話：ストーカー（前書き）

ピカチュン

「間違つて第10話を  
2つも作つて  
しまいました……」

ポツチャマ

「……………ドンマイ」

## 第12話：ストーカー

作者

「でさー、  
ホモエモンさんが  
かなりDSで……」

オトコノ・タマタマ

「病院行けよ……」

作者

「金かかるから  
嫌だ（「」）」

佐藤真中

「じゃ、じゃあ  
私が見てあげる。  
こっ見えても  
医療関係の知識  
あるから。」

作者

「ありがとね。」

ストーリー

「……………」

何よ、何よ！

どうして作者君は  
妹さんのために  
そこまでするの！？

ホモエモン……

昔公衆トイレで  
男子高校生を襲って  
逮捕された人でしょ？

妹さんの使うお金を  
稼ぐためだからって……

それにあの人も

作者君の体に

触れるなんて

100年早いよ！

私なんて今まで1度も  
触った事ないのに……

幼稚園の時から  
好きな作者君……

作者

「佐藤さん、  
ありがとね。」

佐藤真中

「う、ううん……  
作者君のためなら  
このくらい……」

理沙

「ねえ、お兄ちゃん。  
ゲームセンター行こう」

作者

「うん、いいよ。」

佐藤真中

「あ、あの、  
理沙ちゃん……」

作者君は理沙ちゃんのため  
にバイトしてらんだよ？  
すごく大変な仕事を……

理沙

「そんなの当たり前だよ

佐藤真中

へそんな言い方……」

作者

「さあ理沙、  
10万でも100万でも  
どんどん使ってくれ！」

理沙

「うん。」

佐藤真中

「……………」

ストーカー

「……………」

作者君が働くのは  
当たり前！？

何言ってるのあの子！？

作者君はあなたのために  
犯罪者に体を  
売ってるのに……

作者君の背中  
の傷を  
見てもあの反応……

あの子、  
人間じゃないよ！

結局作者君は今日  
5万円使った……

許セナイ……

許せセナイ……

アノ女ダケハ絶対二……

## 第13話：『恋愛回』始まり

### ● 中地雉の家

?????

「起きないよ。  
ねえ、起きないって  
言ってるでしょ?」

中地雉

「……………」

?????

「しょうがないな  
それじゃあ  
お姉ちゃんがキスで  
起こしてあげ……………」

中地雉

「おはよう、姉さん。」

?????

「なんで私が  
キスしようとする  
起きるのよ？」

中地雉

「俺のファーストキスは  
俺の運命の人にするって  
決めてるんだよ。」

?????

「あんだねえ……  
運命の人は  
お姉ちゃんでしょ？」

中地雉

「はいはい、  
そんな事より  
夏実を起こさないと」

?????

「ふーん、お姉ちゃん  
より夏実を  
優先させるんだ……」

中地雉

「夏実を起こしたら  
すぐに朝飯  
食うからさ……」

?????

「10秒以内に  
戻らなかったら  
お姉ちゃん  
何かしちゃうかもよ？」

中地雉

「分かったから……」

そして夏実の部屋。

中地雉

「アクションオオオン  
キイイイイイイイク！」

(ボガッ！)

中地夏実

「痛！」

俺は速攻で  
姉さんの居る所に  
戻った。

?????

「9・56秒。

さて、それじゃあ

朝ご飯食べようか？」

中地雉

「ああ。」

まあ、こんな感じで  
朝飯を食うのが  
いつもの事だ。中地冬子

「はい、雉。  
あーんして。」

中地雉

「誰があーんするか。」

この青髪ストレートで  
巨乳（推定F）で長身で  
美人な人は俺の姉の  
中地冬子だ。

まあ、はたから見れば  
『リア充爆発しろ！』  
なのだろうが

16年一緒に  
暮らしていると  
うんざりしてくる……

中地夏実

「もう……お兄ちゃん  
いつも起こし方が  
酷いよお……」

中地雉

「早く起きない  
お前が悪い。」

このロリっ子は  
俺の妹の中地夏実。

胸はAカップでチビで  
髪は赤のショートだ。

中地夏実

「でも、お兄ちゃんに  
蹴られると  
気持ちいいから  
いいけど」

中地雉 & 中地冬子

「……………」

我が妹よ、それでは  
純一と同類だぞ……

中地冬子

「ほ、ほら、  
早く食べないと  
遅刻するわよ。」

中地雉

「そうだな。  
夏実、お前も早く食え」

中地夏実

「お兄ちゃんが  
あーんしてくれないと  
食べないんだもん。」

中地雉

「なら食うな。」

中地夏実

「うー、お兄ちゃんの  
いじわるう……」

中地雉

「そんなに  
うるうるした目で  
見ても駄目だ。」

中地冬子&中地夏実

(じー)

中地 雉

「……………はあ、  
順番だぞ……………」

中地 冬子

「やったあ！」

中地 夏実

「お兄ちゃん大好き♪」

これが作者みたいに  
血の繋がってない  
兄妹だったら  
もう絶対に  
やってるのに……

やっぱり現実  
はクソゲーだ。  
●通学路

中地冬子

「キジ」

中地夏実

「お兄ちゃん」

中地雉

「お前ら、マジで  
離れるよ……」

夏実の小さな胸と  
姉さんの大きな胸が  
密着してる……

綾瀬さつき

「はぁ……朝から  
女の子2人を  
手玉にとるなんて  
流石は変態。」

中地雉

「お前な……」

この赤髪ツインテールで  
Dカップで背は……  
まあ、普通かな？

中地雉

「姉さん、夏実。  
離れてくれたら  
一緒に寝てやるぞ。」

中地冬子&中地夏実

「！」

2人は0・1秒で  
離れてくれた。

中地雉

「さて、行くか。」

中地冬子

「あ……………また  
騙したわね！」

綾瀬さつき

「そうね。  
早く行きましょう。」

中地冬子

「無視するなー！」

中地夏実

「お兄ちゃんと  
同じお布団で  
寝るって事は  
あんな事やこんな事も！  
えへへ……………」

相変わらずこいつらは  
しょうもないな……綾瀬さつき

「あんたも毎日  
大変ね……」

中地雉

「いや、危なくなった  
時にいつもお前が  
助けてくれるから  
そんなに大変じゃ  
ないよ。  
いつもありがとうな。」

綾瀬さつき

「べ、別に  
あんたが姉妹に  
ベタベタされるのを見て  
嫉妬してるとか助けて  
好感度を上げようなんて  
全然考えてなんか  
ないんだからね！」

中地 雉

「……………」

素直じゃないな……

楠木 彩愛

「旦那あああ……！」

（ドガッ！）

中地 雉

「ぐふっ………」

楠木 彩愛

「旦那、待ってました！」

中地雉

「相変わらず  
ぞっこんだな……」

こいつは楠木彩愛。

授業のサボリ仲間だ。

赤いポニーテールに  
Gカップという爆乳  
引き締まった体……

こいつは男をそそる  
魅力がある。

綾瀬さつき

「……………」

中地雉

「なんだ、  
嫉妬してるのか？」

綾瀬さつき

「嫉妬なんか  
してないわよ！  
なんで好きでもない  
男のために  
嫉妬なんか……」

楠木彩愛

「旦那、今日は一緒に  
昼飯食いましょうよ！」

中地雉

「そうだな……」

中地冬子

「お昼は私と  
一緒だよね、キジ？」

中地夏実

「夏実と一緒にだよ！」

綾瀬さつき

「い、一緒に  
食べてあげても  
いいわよ……」

中地雉

「……………」

こ、困ったな……

一体どうしたら……●休み時間

伊藤理沙

「ねえ、お兄ちゃん。  
今日のお昼は  
レストラン行かない？」

伊藤作者

「え！？あ……  
今日は20万しか  
持ってきてないし……  
午後の授業には  
間に合わないし……」

伊藤理沙

「大丈夫だよ。  
校長は浮気の写真で  
脅せるから  
学校サボっても  
大丈夫だし  
お金もお兄ちゃんの  
銀行から100万円  
持ってきたから  
大丈夫だよ。」

伊藤作者

「よし、行こうか！」

中地雉

「なら俺も一緒に行って  
いいか？」

伊藤理沙

「あ、変態だ。」

中地雉

「相変わらず  
毒舌だな……」

伊藤理沙

「毒舌？うつん。  
客観的に見ただけだよ」

中地雉

「……………」

伊藤作者

「で、キジも一緒に  
大丈夫かな？」

伊藤理沙

「別にいいよ。  
空気だから。」

中地雉

「……………」

俺はこいつが  
苦手だ……

記憶を失う前のこいつは  
健気で優しい  
奴だったけど  
今はどうしようもない  
ワガママ娘だから……

そして昼休み……

俺達は裏から  
学校を出る事にした。

北条キリコ

「あら、中地さん。  
学校をサボる  
つもりですか？」

中地雉

「げっ……」

最悪だ……

まさか犬哭家……  
じゃなくて、

北条家のお嬢様だ……

中地雉

「あ、あの……」

伊藤理沙

「どいてよ、邪魔。」

伊藤作者

「／（＾Ｏ＾）＼」

こ、こいつ、

この世界を支配している

犬哭家……じゃなくて

北条家の者に

ここまで物を

言えるなんて……

北条キリコ

「あなたが噂の  
伊藤理沙さんね。」

伊藤理沙

「そうだよ。  
あなたは誰？」

北条キリコ

「北条キリコです。」

伊藤理沙

「ねえ、お兄ちゃん。  
早く食べに行こうよ。」 中地雉

「あのキリコ会長を  
無視するとは……  
さすがだな……」

肝が据わっているのか  
ただの馬鹿なのか……

北条キリコ

「面白い方ですね。」

中地雉

「え、ええ……まあ……」

伊藤作者

「あ、あの……」

僕と理沙は

学校サボるので

会長さんは

キジとゆっくり

して下さい。

それでは、失礼します」

中地雉

「ちょっと待て！」

北条キリコ

「中地さん、  
生徒会室までご同行  
お願いします。」

中地 雉

「……………はい」

こうして、俺は  
会長様とゆつくりと  
過ごしたのだった。

中地 雉

「いやあー  
助かりましたよ。  
学校をサボろうと  
した事を  
なかった事に  
してもらえる上に  
あの姉と妹から  
かくまって  
もらえるなんて……………」

北条キリコ

「困った時は  
いつでも私に  
相談していいですわよ。  
北条家の名前を出せば  
流石のあの人達も  
あなたにつきまとわない  
でしょう。」

中地雉

「はは……」

しかし、こんな風に  
女の子から  
逃げる日々を送るのも  
悪くないなあ……  
と心の中で思う  
俺が居るもので……

あ、いや、違う。

会長に迷惑をかけるのも  
悪いから

本当に危なくなるまでは  
女の子から逃げる日々を  
満喫……………じゃなくて  
過ぎさないとな！

よし、頑張るか！

第14話：『恋愛回』伊藤作者Ⅱ伊藤誠

●図書室

結崎恵

「……………」

あの黒髪ストレートで  
背が低く胸が小さい  
美人な後輩は結崎恵。

僕の浮気相手だ。

伊藤作者

「やあ、結崎さん。」

結崎恵

（コクリ）

相変わらず  
頭を下げるだけか……

でも、美しいから許す！

伊藤作者

「何やってるの？」

結崎恵

「……………」

何も言わないで  
僕にくっついてきた。

僕は彼女の頭に  
手を回す……

しばらく抑えてきた  
父親（伊藤誠）の血が  
僕を支配する……

伊藤作者

「キスしていい？」

結崎恵

（コクリ）

さて、とりあえず  
キスをした後に  
胸に手を……

坂上あやめ

「センパイ！」

伊藤作者

(チツ……(・|・#))

結崎恵

「……………」

この乱入してきた  
右目眼帯のDカップで  
茶髪ショートの子は  
坂上あやめ。

変わった子なんだけど  
一緒に居ると楽しい。

ただ、空気が  
読めないため  
トラブルメーカーに  
なる事も……

伊藤作者

「あやめちゃん。  
あやめちゃんが居ると  
都合が悪いんだけど……」

坂上あやめ

「だから居るんっす。」

結崎恵

「……………」

ですよねーwww

坂上あやめ

「どうしても恵に  
キスするのなら  
あやめにも  
キスして欲しいっす！」

伊藤作者

「あ、いや、その……………」

僕がそう言っている  
うちに結崎さんが  
僕の唇を……

坂上あやめ

「……………計算外っス。  
まさかあやめの前で  
センパイに  
キスするなんて……………」

結崎恵

(にこっ)

さすが僕の嫁候補。

「お前なんかに  
邪魔できるほど  
2人の関係は浅くない」

って、目で言っている。坂上あやめ

「センパイ、まさか  
恵だけにキス

するなんていう事は  
ないっスよね？」

キンコーン  
カーンコーン！

伊藤作者

「授業の時間だ。  
悪いね、あやめちゃん」

坂上あやめ

「ちえっ……  
そんなにセンパイは  
恵がいいんっスか？」

伊藤作者

「うーん、悩……  
あ、早く授業に  
行かないと……」

僕は慌てて  
教室に向かった。

理沙と結崎さんで  
悩んでるなんて  
口が避けても  
言えない……

坂上あやめ

「恵は酷いっスね……  
あやめがセンパイの事を  
大好きなのを知ってて  
キスするなんて……」

結崎恵

「あなたは哀れよ。  
先輩はあなたの事を  
遊び相手だとか  
思っていない。」

作者の前では  
しゃべらなかつたが  
ライバルに対しては  
とても低い声で  
しゃべっている  
結崎恵さん……

猫を被っていたのだ。

坂上あやめ

「そう言う恵だつて  
センパイにとつては  
妹さんと同等じゃ  
ないっすか……」

結崎恵

「フフツ……  
あんな女なんか  
僕の敵じゃない。  
先輩は僕と心が通じるの  
以心伝心って奴かな？  
だから僕には分かる。  
先輩の心は僕の魅力に  
惹かれている。」

坂上あやめ

「そうっスか？  
恵は先輩の事を  
分かってないと  
思っスよ？」

結崎恵

「分かるよ。  
だって同じ父親の血が  
共鳴してるから……」

坂上あやめ

「……………そうっスか  
誠と世界の子供が……」 結崎恵

「だから他の女に  
勝ち目なんてない。  
どうせ気が合わなくて  
終わっていく。  
でも、僕は違う。  
僕達に流れる血は  
僕達を支配する。  
異性を傷つける  
呪われた血……」

だけど、同じ血が流れる  
僕達なら  
互いを理解し合い  
互いを喰らい、  
互いを鎮める事ができる  
他の人間では  
理解する事のできない  
先輩の行動も僕なら  
理解できる。  
だから僕は……」

（パシンッ！）

坂上あやめは結崎恵に  
ビンタをお見舞いした。

坂上あやめ

「センパイは  
センパイっス！  
父親が誰であろうとも  
関係ないっス！」

結崎恵

「まあ、いいわ。  
どんなに頑張っても  
あなたは僕や  
理沙さんと同じ風には  
扱われない。  
それだけは  
分かってるわ。」

坂上あやめ

「やってみないと  
分からないっス！」

結崎恵

「じゃあやれば？」

坂上あやめ

「言われなくても  
するっスよ！」

結崎恵

「本当に可哀想な人……  
伊藤誠の血をひいている  
先輩……いや、  
兄の恐ろしさを  
知らないで……  
どんな風に傷つくのか  
ちよっと楽しみかな？」  
●教室

伊藤理沙

「ねえ、お兄ちゃん。  
結崎恵に  
キスしたって本当？」

伊藤作者

「そ、それは……」

伊藤理沙

「したんだ……」

伊藤作者

「そ、そんな事は……」

伊藤理沙

「お兄ちゃん、  
どうしてなの？  
お兄ちゃんは  
私のためのだけに  
存在しないと  
いけないのに  
どうして他の女なんか  
手を出したの？  
お兄ちゃんから  
誘ったの？  
それとも女が  
誘惑してきたの？  
だったらあの女を  
消してやる……」

伊藤作者

「あ、いや、  
僕からです……」

伊藤理沙

「……………そう  
お兄ちゃんは今まで

私だけを愛していると  
思ってた。  
だけど実は二股かけてて  
他の女も  
愛してたんだ……  
へえ………なんか  
裏切られた気分………」

伊藤作者

「で、でもさ……  
かなり無口だけど  
可愛い子なんだよ！  
ちよつと照れて  
笑った感じとか  
顔を真っ赤にしながら  
僕に甘える姿なんか  
もう〇〇〇ツ〇  
間違いなしだよ！」

伊藤理沙

「お兄ちゃんは  
悪い子だ……  
この目が悪いのかな？  
この目がなくなれば  
お兄ちゃんは  
私だけを……」

あ、それとも

このお○○○○かな？  
甘えられて大きくなる  
これがなくなれば……」

伊藤作者

「理沙、目が  
マジだから  
かなり怖いよ……」

伊藤理沙

「だって……  
マジだから。」

伊藤作者

「／（＾Ｏ＾）＼」

お父さん、僕は  
あなた以上の人生を  
経験しそうです……

坂上あやめ

「ちよつと待つっス！」

伊藤作者

「ナイスタイミング！」

救世主だ……

神が僕に救世主を  
送ってくれた……

ポツチャマ

「そんな救世主で  
大丈夫か？」

伊藤作者

「大丈夫だ、問題ない」伊藤理沙

「これも浮気相手？」

伊藤作者

「そいつは違うよ！  
命を懸けてもいい。  
そいつだけとは  
絶対じゃない。」

坂上あやめ

「センパイ、あやめが  
助けに来たっスよ。」

伊藤理沙

「あやめちゃんは  
黙っててよ。」

これは私とお兄ちゃんの  
問題なの。」

坂上あやめ

「センパイは  
お前や恵と一緒にじゃ

不幸になる一方っス。  
センプイの身を削って  
私腹を肥やすお前と  
センプイを騙している  
恵なんかと一緒に……」

伊藤作者

「結崎さんが  
僕を騙してる!？」

伊藤理沙

「ふーん、お兄ちゃんは  
結崎さんの事が  
そんなに  
気になるんだ……」

伊藤作者

「あ、あの……いや、  
これには訳が……」

伊藤理沙

「そうなんだ……」

それじゃあ

お家に帰ってから

じっくりと

その訳を聞こうかな……

伊藤作者

「ちょ、ちよつと

あやめちゃん！

なんだか状況が

悪くなっているのは

気のせいですか？」

坂上あやめ

「大丈夫っス。

あやめが居れば

どんな状況でもセンパイ

を助けられるっス！」

伊藤作者

「よし、任せ……」

（ガラガラガラ……）

教室に誰か入って来た。

入ってきた人物は……

結崎恵

「……………」

伊藤作者

「／（＾Ｏ＾）＼」

おー、何ってこったい！結崎恵

「……………」

伊藤理沙

「あなた誰？」

理沙がそう聞くと  
僕を指差して低い声で  
こう言った。

結崎恵

「……………彼女」

オワタ…………

伊藤理沙

「そう……………それじゃあ  
消えてもらおうかな……………」

ま、まさか…………

キン コーン  
カーン コーン！

結崎恵

「……………」

伊藤理沙

「あ、逃げるな！」

坂上あやめ

「センパイ、  
また休み時間に  
来るっス。」

伊藤作者

「お願いしますm」  
「m」

しかし、授業中も  
理沙に睨まれたままで

あつた……

佐藤真中

「作者君、大丈夫？」

伊藤作者

「ま、まあね……  
でも良かったよ。」

佐藤真中

「良かった？」

伊藤作者

「嫉妬するって事は  
それだけ僕の事を  
愛してくれてる  
って事だからね。  
いやー、  
やっぱりヤンデレ  
最高だよ（　　）」

佐藤真中

「……………そんなの  
愛じゃない……………」

伊藤作者

「はい？」

佐藤真中

「作者君にまわりつく  
女達は作者君の事を  
本気で愛してない……  
本気で愛しているのは  
私だけ……  
作者君を愛せるのは  
私だけの……  
それなのに、  
あの女達は！」

伊藤作者

「／（＾Ｏ＾）＼」

この人もヤンデレだ！

いやー、嬉しいっスね。

そうだな……タイトルは  
「病ンデル世界ニ  
病ミナガラ……」

うーん、いまいちだな。

『病ンデル作者ニ病ムヒロイン』

よし、これで行こう！  
●ストーリーカー視点

ストーリーカー

☆どうしてなのー！☆

どうして作者君は  
あんな無口な人と  
ワガママな人を  
愛してるの！？

ま、まあ、まだ  
2人だけしか  
本気に考えてないから  
なんとかなるかも  
しれないけど……

まさか結崎さんとは  
キスする仲にまで  
なってるなんて  
最悪だよ……

私ならもつと上手く  
キスできるのに……

キス以外の事だつて  
平気でできるんだよ。

それなのに……

作者君はやっぱり  
あの2人に  
騙されるのかな？

うん、絶対そうだ。

妹さんのために  
ホモタウンの親方の  
ホモエモンに  
体売って  
お金を稼いだり、  
あんなに無口な子の  
相手をしたり……  
まともに話した事のない  
女の子と付き合うなんて  
おかしいよ……

きっと妊娠してるとか  
作者君の弱みを  
握っていたり……

間違いないよ！

だったら私が  
守ってあげないと！

待っててね作者君。

私が悪い子から  
守ってあげるから！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2212v/>

---

準備中

2011年11月11日10時51分発行